

特集

ありがとう 磯部さん

黒田武彦（兵庫県立西はりま天文台公園）

1. 磯部さんとの出会い

「私の大学院時代に行った研究の続きの様な感じがして嬉しくなりました。資料をお送りします。研究に役立てば幸いです。」こんな手紙とともに数多くの論文のコピーが送られてきた。差出人は東京天文台助手の磯部さん名義だった。

実は 1973 年、日本天文学会の内地留学奨学金（当時は大塚奨学金と呼んでいた）をいただき、散開星団の 3 色光電測光から星間赤化量を求める観測を行う予定だった。内地留学時は来る日も来る日も天気が悪く、結局予定していた観測はまったくできなかった。そこで、ルビン（1962）やボノー（1967）の OB 型星カタログ等から 1440 個の星を選び、測光から得られた色超過 $E(B-V)$ と距離引数 $m-M$ の相関係数として全吸収対選択吸収比 R を様々な銀経に対して求め、1976 年 2 月号の天文月報に報告、 R 値の傾向が磯部さん（1968）の求めた結果と同じ傾向であることを示した。

このときの天文月報編集者のお一人が磯部さんだったことが幸いした。次から次へと送られてくる論文に圧倒されながらも、自分が実際にやりたかったことを手紙で書いた。その時代、カシオペア座からおうし座にまたがる Cas-Tau 運動星団が実際に存在するのかわりに関心があり、測光を行い、星間吸収等を補正して実際の空間分布を求めようと考えていた。そうすると今度は運動星団に関する論文をたくさん送ってくださった。

その後、バラ星雲領域の星間吸収を電波観測（海部さんの修士論文）と $H\alpha$ 観測を比較することによって星間赤化量の分布図を作成したときも、懇切丁寧にデータ処理の誤り等

をご指摘下さった。

そんなご縁もあって、国際会議で発表する天文教育のアンケート調査等に協力することになった。これが専門を離れ、天文教育で磯部さんと長いお付き合いをする最初のきっかけとなった。1986 年のことである。

2. 天文教育との関わり

磯部さんのアンケート調査は全国の天文教育関係者を大いに喚起した。磯部さんにすればアンケートをして、1 回くらい集まりをもっていろんな意見を集約できればという気持ちだったと後でうかがった。ところが翌年夏、北軽井沢の駿台学園一心荘で開催された天文教育の会合には数多くの参加者があり、白熱した議論となった。世話人の一人として、どんな教科書が望ましいかという分科会を取り仕切らせてもらったが、午前 1 時を過ぎても議論の輪が解けることはなかった。何とか会として存続させることはできないか、という声が大半を占めた。とにかく来年もやってみようということで別れたが、2 回目も 3 回目も一心荘は燃えに燃えた。

磯部さんは何事につけても妥協を許す人ではなかった。それは会の名称をどうするかでさえ真剣そのものであった。大阪人である磯部さん故に、関西風の「まあまあ」が通用すると思って適当な妥協をお願いしたが聞き入れてもらえなかった。つまり「天文教育研究会」にするか「天文教育普及研究会」にするか、深夜の大激論をするほどのことではなく、「まあまあ」で事を納めようとしたのである。しかしこれは全く通用しなかったが、今でも大したことではなかったと思っている。結果的に「普及」が入ってよかった、という方も

いらっしゃるが、要は中味の問題だと思っていた。会の名称は短い方が良いという大勢は押し切られる形になった。実は既にゴム印も郵便振替の口座も「天文教育普及研究会」で作成済みだったため、引くに引けなかったのも一因だったようである。磯部さんの本音をとうとう聞けずじまいだった。

そんなこんなで初期の天文教育普及研究会では、私も役員の一員として、それなりのお手伝いをさせてもらった。一心荘が定番になりつつあった研究会、長続きさせるためには全国各地で開催し、多くの方に参加の機会をと提案されたのも磯部さんだった。第4回目、磯部さんの思いに呼応すべく手を挙げさせていただいたのが、完成したばかりの兵庫県立西はりま天文台公園だった。暑い夏の日、初めて北軽井沢を離れた研究会は、これまた初めて懇親会らしい懇親会も経験した。磯部さんは私から見ればすごくまじめで（私ですらよくクソまじめと言われてきたが）、一心荘の懇親会は単なる夕食会であったという記憶しかない。余興をいっぱい行い、かなり羽目を外した西はりまの懇親会は磯部さんにはどのように映ったのだろうか。これもうかがう機会を逸してしまった。

3. アクティブな磯部さん

磯部さんは様々な分野にそのパイオニア精神を如何無く発揮された。すばる望遠鏡計画の推進役となった光学赤外天文学連絡会（光天連）を創られたのは磯部さんである。国立天文台天文情報センターの前身である天文情報普及室もそうである。国際スターウォッチングと称して、東南アジアの天文関係者を招聘し、日本各地を巡ってスターウォッチングの実際を体験したり、国際交流を行ったりという糸口も創られた。そして日本スペースガード協会。それらのすべてに様々な形で参画させていただいたり、協力もさせていただ

た。ついていくだけでも結構大変、すごいエネルギーな磯部さんにいつも脱帽であった。

磯部さんは著作も多かった。お知り合いになってからは上梓された著書をずいぶんいただいた。オリオン座の星形成領域の研究を進められた成果として、一般書にまとめられたものも多かった。私の関心の高い分野でもあり、いつもわくわくしながら一気に読み終えたことを思い出す。

いただいた著書でショックだったのは『太陽の輪の謎に挑む』（けやき出版刊）であった。日頃から「身体はもうボロボロでダメなんですよ」とは聞いていたものの、私は磯部さん特有の悪い冗談だと思っていた。ところがこの本の帯に驚くべき事柄が記されていたのである。「48歳の天文学者が妻と幼い娘に遺書を書いてメキシコへと旅立った。肝臓病・高血圧という爆弾を抱えて5,250メートルの頂上をめざす彼にとって、それは人生最後の挑戦のつもりだったのだが……。」

このとき本当に遺書を書かれていたのである。私は本をおもしろくするための脚色くらいに思っていた。そこまで覚悟されていたのを亡くなられて初めて知って愕然とした。なぜなら磯部さんは私にとっては、いつもスポーツマンらしい元気さで接してくださり、少しトゲ？のある物言いでムッとさせてくださり、新しい試みには必ずと言っていいほど声掛けをしてくださったりで、常に前へ前へ進み続ける方というイメージしか持っていなかったからである。

そう言えば数年前、磯部さんから「折り入ってお願いがあるのですが……」と電話があった。「国際天文学連合（IAU）の第46委員会はご存知のように天文教育に関する委員会です、日本代表を長らく務めてきたのですが、そろそろ交代をする時期、黒田さんにやっていただけないかと電話をしたんです。」という

ものであった。磯部さんがそこまで私を買って下さっているということに感激をしたが、私は未だ学位を持っていないので（頑張る気持ちはあるのだが?!）IAUの会員ではない。そんなことでご納得をいただいたが、残念そうな磯部さんの声が今も耳の奥に残っている。実力が伴ってなくて本当に申し訳なかったと思う。国際的にも天文教育分野で活躍をなさってきたが、やはり体力の限界を悟られてのことだったのだろうか。ちなみにIAUの第46委員会のホームページに次のような磯部さんの死亡告知がなされている。

SYUZO ISOBE

We regret to announce the death of Dr Syuzo Isobe on 31 December 2006, President of Commission 46 2000–2003. Accounts of his life and work will appear in the March 2007 edition of the C46 Newsletter.

4. 最後となったメール

一昨年（2005年）の10月、私は東京の駿台学園で長く続けておられる「駿台天文講座」の講師を依頼された。西はりま天文台に完成した2m望遠鏡が目指す宇宙を楽しく講演させていただいた。駿台学園といえば磯部さんが大学院生時代からご指導をなさってきた学校で、天文講座には当然のようにお顔を出しておられた。

磯部さんの前での講演はやりづらいものである。いろいろと教えを受けてきた身としては「黒田さん、それ間違ってますよ!」という声が飛んできそうで緊張してしまうのである。でも終わってから「とても面白かった。最近になく聴衆も盛り上がってましたよ。」とうかがってほっとしたことを思い出す。

昨年の4月に入ってすぐ、磯部さんからメールが飛び込んで来た。講演で使ったパワーポイントに関する質問だった。そこには磯部

さんの体調に関することも記されていた。

「黒田様 二人とも体調に問題を抱えていながら（注：私も狭心症、高血圧!）、一方はそれを感じさせない元気を示しておられ、よれよれの方はうらやましく思っています。さて、前回駿台でお話いただいた折に、地球の形状に関する図をお示しになりましたが、球状、回転楕円体、ジオイド間の高度差の図も示されました。それらの図を私にも使わせていただきたくお願いいたします。メールでお送りいただければ幸いです。よれよれの人間を助けてやってください。お願いのみで失礼します。磯部（2006年4月6日）」

そして何回かメールのやりとりをして、以下のメールが私にいただいた最後のものとなった。

「黒田様 有り難うございました。それにしても、早く定年の喜びを味わいたいものです。このままでは、味わえないまま人生が終わりそうです。磯部（2006年4月15日）」

もちろん、磯部さんのご定年は過ぎていた。スペースガード協会の運営や、その他のお仕事にまだまだ東奔西走されていたものと思う。「定年の喜び」が何を意味するのかは私にはわからない。磯部さんはもしかすると奥様やお嬢様といっしょにゆっくりと世界一周の船旅でもなさりたかったのだろうか。「味わえないまま人生が終わりそうです」……これは磯部さんが唯一し残した私たちの想像をはるかに超えるゆったりとした家族サービスであったような気がする。

64歳、余りにも早すぎます。しかし、磯部さんご自身は、他の人の100歳分も200歳分もお仕事をされました。後は頼りない私たちにお任せいただいて、どうかゆっくりとお休みください。ありがとうございました。遠くないうちに会いに行きます。

黒田武彦